■研究発表論文

奄美大島におけるノロ祭祀空間の継承状況に関する研究

Study on Succession of Ritual Places by “Noro” in Amami Oshima

押田　佳子*　　松尾　あずさ**　　浦出　俊和***　　上田　萌子***　　大平　和弘****　　上甫木　昭春***

Keiko OSHIDA　Azusa MATSUO　Toshikazu URADE　Moeko UEDA　Kazuhiro OHIRA　Akiharu KAMIHOGI

Abstract: Since middle ages Ryukyu Kingdom, Amami Oshima have long had faith in such an indigenous folk religion as Noro. This religion maintained sanctuaries such as Kamiyama(a holy mountain) and Kamimichi(a clean way),miya(a central plaza),toneya(a religious hut). However, Noro faces the crisis of the extinction as a result that a religious system changed under the influence of the modernization. Therefore, we investigated the succession of Noro religion in each village and relationship with ritual spaces from interview to regional inhabitant. As results, it was clarified that the village events as “the respect for the elderly festival” and Noro religion such as “the harvest festival” were gathered, to reduce the burden on local resident and to invite gallery. Moreover, it was confirmed that miya and toneya were not only easy to maintain but also utilized. On the other hand, kamiyama was maintained but is not used. Moreover, kamimichi was just before disappearance without being used.

Keywords: *ritual place, Noro, succession, Amami Oshima, sanctuary*
キーワード：祭祀空間，ノロ，継承，奄美大島，聖域

1．はじめに

「奄美」は鹿児島県の南の海上約 380km に位置する島嶼群であり，かつ琉球列島の一部でもある奄美群島を指し，8 つの有人島を含む島々が約 200 ㎞の範囲に点在している。気候的には他の琉球列島と同じく亜熱帯気候に属し，モンスーン気候による多雨とかつての大陸島からの隔離のプロセスにより固有種に富む豊かな自然環境を有している [1]。奄美の独自性は文化的側面にもみられ，沖縄と鹿児島のほぼ中間に立地することより，長い歴史の過程の中で大和文化と琉球文化双方の影響を受けて成立してきた [2]。

この中心となったのが，奄美群島最大の島である奄美大島であるが，島民による統治が行われたのは中世頃までと考えられており，以降は壇ノ浦の戦いに敗れた平家武将による統治，15 世紀には琉球王国，17 世紀には薩摩藩の支配下に置かれた後，近代には廃藩置県により鹿児島県に編入，1879（明治 12）年の太政官通達により正式に日本の領域に認定へと至っている。さらに 1945（昭和 20）年には，第二次世界大戦の敗戦に伴い米国民政府の統治下に置かれたが，活発な復帰運動が功を奏し，1953（昭和 28）年の本土復帰を経て現在に至っている [3][4]。

このように，奄美大島は 800 年以上の長きに亘り，様々な文化が混在する場であったが，特に島の文化に大きな影響を与えたのが那覇世（ナハユ）と呼ばれる琉球王朝統治期における，「ノロ制度」の導入である。女性神役「ノロ」は，琉球最後の王朝である第二尚氏王統期第三代尚真王の治世に確立した中央集権制の下，「辞令書」で任命された，地方の村落を国王の支配下に組み入れる宗教的権威者である [5]。この制度は，1609（慶長 14）年に薩摩藩の支配下となった際に法令によって琉球王府からの辞令書授受を禁じられて以降徐々に衰退していった。しかしながら，一部の集落では精神的支柱としてのノロは粛々と継承され，その後集落ごとに独自の変容を遂げることとなった。この過程でノロ祭祀に用いられる祭祀空間（聖地）も集落構造の一部として継承されてきたが，1970 年代以降，ノロの高齢化や後継者不足によってノロ不在となる集落が相次ぎ，奄美大島におけるノロ祭祀は消滅寸前となっており，ノロ祭祀文化の保全や継承の在り方が問われている状況にある [6]。

奄美大島におけるノロ祭祀に係わる研究の多くは，衰退傾向にありながらもノロ祭祀が実施されていた 1970・1980 年代に民俗学的な知見より調査されたノロの継承系統やノロ祭祀の世界観について言及した研究 [7]を基に取り組まれており，集落ごとの祭祀形態の違いやその変容を捉えた研究 [5]や民俗学的知見よりノロ祭祀に係わる施設の空間構成を捉えた研究 [8]などがある。これらにおいて扱われているノロ祭祀ならびに施設は，調査当時から約 40 年が経過しており，さらにノロ祭祀が廃れているであろう現状の維持･継承問題を検討するための裏付けになり難いと考えられる。

比較的近年に取り組まれたものとしては，建築学および民俗学的な知見よりノロ信仰に基づく居住者の空間概念とその秩序を分析した研究 [9]があるが，基本的には過去のノロ祭祀空間 [7]に関する知見に基づいている。

また，廃れ行くノロ祭祀そのものを将来に伝承するため，昭和時代より各自治体や集落において記録する動きがみられ，奄美市（旧名瀬市）や大和村の市村史，集落誌 [10][11][12]にも詳細な事項が記録されており，特に 2010 年に編纂された大和村誌は，現在のノロ祭祀が置かれている危機的な現状が詳細に記されている [11]。また，大和村誌に係わった津波 [13]によって，ノロの継承のされ方の知見が覆されるなど，ノロ祭祀に関する新たな発見もみられる。

このように奄美群島のノロ祭祀に係わる研究は，概ねノロ祭祀が危機的であると認識された 1970 年前後と，多くの集落でノロが途絶えた 2000 年以降との 2 期に分かれると考えられるが，ノロによる継承が長らく口伝であり資料が残されなかったこと，祭祀そのものが集落内で完結されていたことに加え，上述の通り集落ごとに独自の変容を遂げたことなどにより，全容を把握する前に消滅の危機に至っている現状にある。さらに，時間の経過とともに消失の危機はノロ祭祀空間にも及んでおり，現状のままでは

*日本大学理工学部　**法政大学沖縄文化研究所　***大阪府立大学大学院生命環境科学研究科　****兵庫県立人と自然の博物館

ノロ祭祀の記憶は集落構造からも途絶えてしまう恐れがある。

そこで本稿では，奄美大島における祭祀空間の構成とその活用状況との関係より，ノロ祭祀およびその祭祀空間の継承状況を明らかにすることを目的とする。

2．奄美大島におけるノロ祭祀と祭祀空間構造

慶応4（1868）年に発布された「太政官布告（通称：神仏分離令）」では，ノロ祭祀が禁止されており，奄美群島の中でも与論島，沖永良部島，徳之島，喜界島においては，ノロおよびノロ祭祀が姿を消した。しかしながら，加計呂麻島と奄美大島では豊漁祈念のために一部の集落において残存，あるいは近年まで残存していたことが確認されている[6]。

「沖縄・奄美の歳時習俗」[14]によると，奄美大島において集落単位で実施されている年中行事は28件あり，このうちノロが係わる祭祀には「ウムケ（オムケ）」「ウホリ（オーホリ）」「アラホバナ」「フーウンメ」「フユウンメ」などがあり，これらを行う場所や日取りは集落ごとに異なる[5)6]。

先行研究によると[6)7]，ノロ祭祀における祭祀空間（聖地）には，集落毎の差異は認められるものの「カミヤマ（オボツヤマ）」「カミミチ」「ミャー」「トネヤ」「イジュン」「アシャゲ」の6つが挙げられる。湧上（1974）[6]に基づき，図－1に集落における祭祀空間の概念図を，以下に各祭祀空間の特徴を述べる。

（1）カミヤマ（神山）（図－1①）：神が去来する最も主要な聖地となる山であり，名称や形態に地域差はあるものの原則木の伐採や立入が禁止されており，禁止行為をすると祟りがあるとされてきた。通常「オボツ」山と呼ばれ，集落の背後にある。

（2）カミミチ（図－1②）：カミヤマに来臨した神が山から集落に降臨する際に通る道。神聖な道のため不浄なことをしたり，日常使用することが禁じられている。この禁忌も集落ごとに異なる。

（3）ミャー（ミヤ）（図－1③）：集落の中心にある広場。年中行事である八月十五夜と旧暦九月九日（豊年祭）には，ミャー内に土俵を設け，神に捧げるための相撲をとる。従来は豊年祭時に土俵を設置したが，近年は集落人口の減少並びに高齢化の影響を受け，常設化されることが多い。

（4）トネヤ（図－1④）：一般民家と同様の建築様式である「祭場」であり，トネヤの神という集落の神が祀られる。祭祀における唯一の男性神役の「グジヌシ」が管理に携わることが多く，グジヌシの住宅である例もある。なお，トネヤはノロの人数に左右されるため，必ずしも1集落に1軒ではない。

（5）イジュン（図－1⑤）：集落において清めの水とされる泉または井戸を指す。かつては集落の貴重な水源かつノロや奉納相撲の参加者が利用するなど，日常生活・祭祀ともに重要視されていたが，上水道の普及により地域での利用が為されなくなったことやトンネル掘削などの周辺開発によって泉が枯れる，などの理由から現状が確認できないものが多いため，本稿で取り扱う祭祀空間より除外した。

（6）アシャゲ（図－1⑥）：ミャーに建てられる祭場であり，通常簡素な構造の建屋となっている。なお，本研究の対象地とした5集落では，40年以上前にアシャゲが消失し現存しないため，本稿で取り扱う祭祀空間より除外した。

3．調査対象地の選定

本研究では，先行研究において比較的近年にノロ祭祀の調査が実施された奄美大島北海岸に位置する奄美市大熊（ダイクマ），根瀬部（ネセブ），大和村津名久（ツナグ），大棚（オオダナ），名音（ナオン）の5集落を対象とした（図－2）。なお，対象地の選定にあたっては，近年における奄美市・大和村のノロ祭祀の調査[10)11)12]状況に詳しい現地有識者であるH氏とTK氏へのヒアリング調査より，近年までのノロ祭祀の継承あるいは消失状況が把握でき，ノロ祭祀および祭祀空間についてヒアリング可能な対象者を確認できたことに依る。

4．調査方法

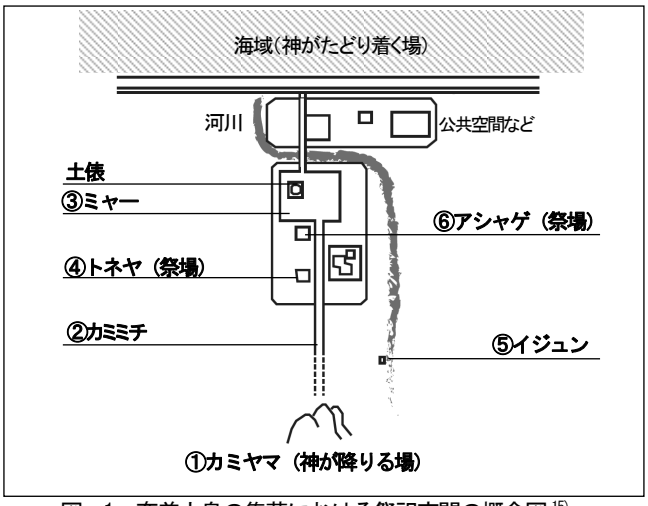
本研究では，奄美大島におけるノロ祭祀および祭祀空間の継承状況を調査するとともに，これらを継承させる要因を明らかにするため，1）昭和期までのノロの所在およびノロ祭祀に係わる文献調査，2）近年の奄美大島のノロ祭祀調査状況[10)11)12]に詳しい有識者へのヒアリング調査，3）現地における祭祀空間の所在確認調査，4）ノロ関係者へのヒアリング調査，を実施した。なお，3）において，多くのミャーに公民館と常設の土俵がみられたことより，本稿では前上述したカミヤマ，カミミチ，ミャー，トネヤに加え，これら2つの付帯施設の有無についても確認した。詳細な調査概要を表－1に示す。

5．各集落におけるノロ祭祀および祭祀空間の継承状況

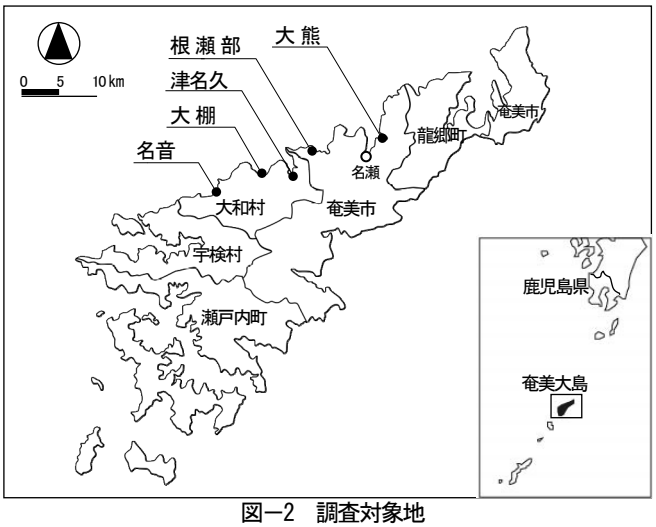
文献および現地踏査結果より得られた各集落地図および祭祀空間配置図を図－3に，文献およびヒアリング調査結果より得られた集落の年中行事の継承状況を表－2に示す。以下，集落ごとにおけるノロ祭祀と祭祀空間の継承状況について述べる。

（1）大熊

古来より湾内東側に伸びている入江が港として利用されており，図－3①より，大熊集落はこの入江を縁取るように三方を山に囲



図－1　奄美大島の集落における祭祀空間の概念図[15]



図－2　調査対象地

表－1　調査方法

1) 文献調査　（実施期間：2013 年 5 月～2017 年 3 月）		
文献資料より，祭祀および空間構造に関する項目を抽出した。 ○主な参考文献：名瀬市誌，大和村誌，祭祀空間の構造，沖縄奄美の民間信仰，ほか		
2) 現地有識者へのヒアリング調査		
実施日：2013 年 11 月 21 日　場所：奄美市立奄美博物館 対象者：学芸員　TK 氏，H 氏		
3) 現地における祭祀空間の所在確認調査		
2013 年～2016 年に述べ 6 日間実施。いずれの調査も地形図および文献資料を参照しながら祭祀空間の所在確認を実施した。なお、調査対象地は下記 4) に相当する。 実施日　2013 年 11 月 22 日、23 日、24 日、2015 年 1 月 24 日 2016 年 8 月 30 日、31 日、9 月 1 日		
4) ノロ関係者へのヒアリング調査（対象者の年齢はヒアリング当時のもの）		
実施日	調査対象者	対象集落
2013 年 11 月 22 日	TN 氏（姉が集落最後の親ノロ※※、男性神役のグジヌシを務める）	大熊
	N 氏（大和公民館長、母親が子ノロ※※※であった）	津名久
2015 年 1 月 24 日	NS 氏（子ノロ※※※の末裔） U 氏（母親が子ノロ※※※）	大棚
	F 氏（母親が集落最後の親ノロ※※	名音
2016 年 8 月 30 日	TN 氏（84 歳）（2 回目）	大熊
2016 年 8 月 31 日	U 氏（81 歳）（2 回目）	大棚
	F 氏（84 歳）（2 回目）	名音
2016 年 9 月 1 日	K 氏（83 歳）	根瀬部
＜ヒアリング項目＞ 1）ノロの継承状況：ノロが存在する場合はノロの年齢や神役の構成，ノロ不在の場合は不在となった時期，経緯 2）集落におけるノロ祭祀および年中行事について：現在行われている祭祀，行われなくなった祭祀とその理由，集落行事へと転じた祭祀の有無 3）ノロ祭祀空間について：現存する祭祀空間とその位置，かつて存在した祭祀空間とその位置，失われた理由 4）祭祀空間と集落との係わりについて：ノロ祭祀における祭祀空間の活用状況，現況における集落管理		

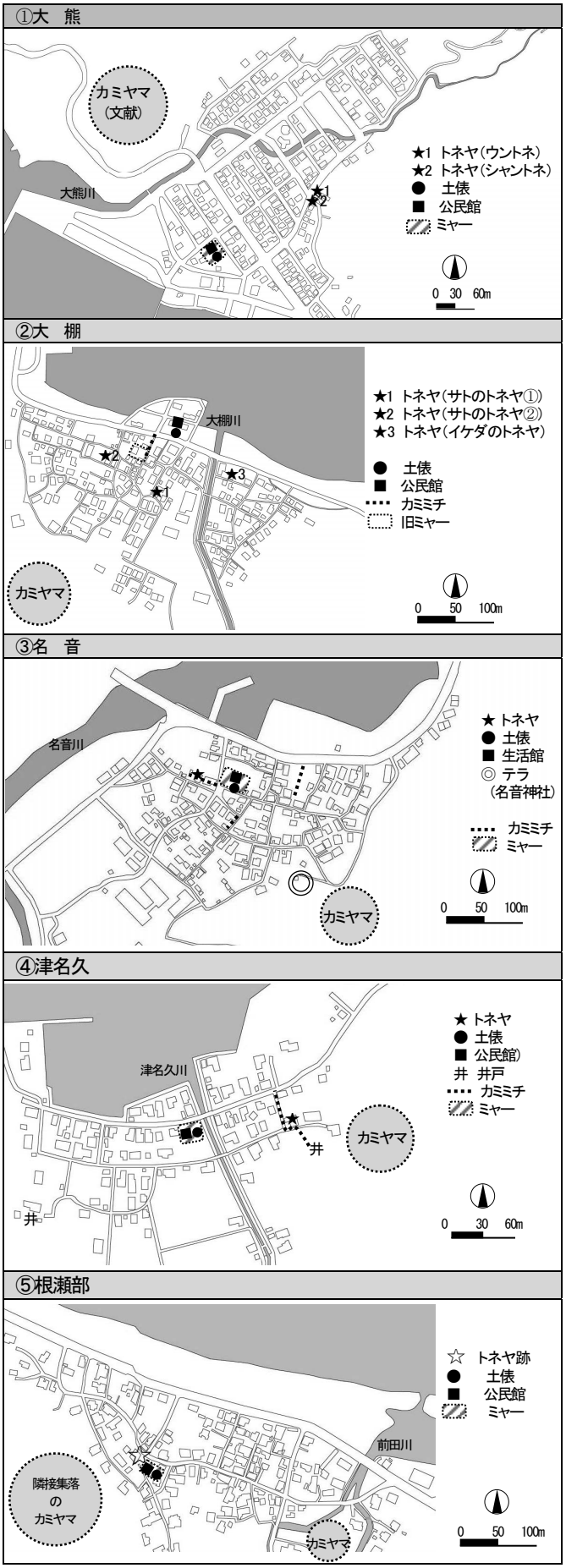
※　対象者の年齢はヒアリング当時のもの
※※　親ノロとは祭祀を司るノロの中心役であり，後継者を家筋（特定の姓）により選出する。
※※※子ノロとは別名ミキガミとも呼ばれ、、親ノロ以外の神役を指す。特定の姓から選出される。

まれた狭い扇状地に営まれてきた。全対象地において最多人口約 1,100 人を抱える大熊集落は [16]，平成 15（2003）年に祭祀の中心的役割を果たす親ノロ [17]が亡くなるまでノロ祭祀が継承された地域である。親ノロは原則家筋により継承され，かつてはこのほかにウッカン（右脇ノロ，左脇ノロ）というノロがいたが，逝去に伴い現在は親ノロと同様に不在となっている [5]。

表－2 より年中行事におけるノロ祭祀の継承状況をみると，全 13 行事中，ノロと係わりが深いノロ祭祀は 12 行事あるが，ノロが不在となって以降も祭祀として継承されているものは「インバンジレイ」「豊年祭（十五夜）」の 2 行事のみであり，このうちインバンジレイは親ノロ不在後もグジヌシの TN 氏夫妻により自宅敷地内に立地する祭場であるトネヤのうち「ウントネ」で執り行われている。大熊のトネヤは，グジヌシが管理する「ウントネ」とノロが居住する「シャントネ」の 2 種類があることが特徴とされており，ノロ不在後はウントネのみを活用している。

旧暦八月十五日に開催され，五穀豊穣を祈願する「豊年祭（十五夜）」は，集落を出た人も参加する「敬老会」を同時に催すため，ノロ祭祀と集落行事が一体化した盛大なものとなっており，集落の男児を中心にカミに捧げる豊年祭相撲をとる習わしとなっている。TN 氏によると，男児らはウントネ前でお清めしてから公民館に併設する集落の中心的広場「ミャー」に至り，その後ミャーに設置された土俵で相撲を取るという手順を踏む。

親ノロ不在後にノロ祭祀から集落行事へと転じた行事は，「アラセチ」「シバサシ」「ドゥンガ」といずれも八月踊りに関連する 3 行事であり，旧暦の八月を一年の折り目と捉えていたことに由来とするものである。TN 氏によると，「アラセチ」から「シバサシ」に至る 7 日間は集落全体で八月踊りを踊る風習があり，かつては両トネヤの前で踊っていたが，1996 年に区画整理が入りトネ



図－3　各集落地図および祭祀空間の配置

表－2　ノロ祭祀を含めた集落の年中行事※

時期	祭祀名	概要	大熊		大棚		名音		津名久		根瀬部		実施集落数と内訳				
			継承状況	場所	継承状況	場所	継承状況	場所	継承状況	場所	継承状況	場所	集落数	○	×	△	□
新暦・旧暦1月2日	インバンジレイ（印判辞令）	トネヤに保管されているインバン（印判＝古琉球辞令書）に関わる祭事＜村落祭祀の中心＞	○	シャントネ									1	1	0	0	0
旧暦２月の中壬の日	テロコガミ（海神）祭り（ウムケ）	テロコガミを迎える祀							×	トネヤ			1	0	1	0	0
旧暦３月の初庚の日	マンセンガミ（海神）祭り（ウムケ,オムケ）	マンセンガミを迎える祀	×	シャントネ	○	サトノトネヤ②							2	1	1	0	0
旧暦３月の初庚の日から１４日目	マンセンガミ（海神）祭り（ウフリ、オーホリ）	マンセンガミを送る祀	×	シャントネ	○	サトノトネヤ②							2	1	1	0	0
４月の申または寅の日，壬の日	ハマオレ（ハマオリ）、ムシカラシ	田や畑の虫を捕ってきて川や海に投げ捨て、稲の害虫や病気を除く稲作行事の一つでもある。					×	不明			×	不明	2	0	2	0	0
旧暦４月最初の午の日	ハツマネ（ンマーネ）	ハブを鎮める日とか、ハブを除ける日といわれ、仕事を休む日である									×	不明	1	0	1	0	0
旧暦４月中壬の日	テロコガミ（海神）祭り（オホリ）	テロコガミを送る祀							×	トネヤ	×	不明	2	0	2	0	0
旧暦6月の丑、寅の日,稲が実り刈り入れ前の戊の日	シキュマ、イニーシキョマ	家の内外の大掃除を行い家財道具等を海や川で洗い清め、田から家までの道を伐採清掃し清める。									×	不明	1	0	1	0	0
旧暦6月の第1、第2庚の日	アラホバナ	初穂の成熟を祝い豊作を予祝する祭事	×	ウントネ									1	0	1	0	0
旧暦7月	フーウンメ	収穫が終わったことを祝う祀	×	ウントネ	○	全トネヤ	×	不明					3	1	2	0	0
旧暦8月15日	豊年祭（十五夜）	五穀豊穣を祈願し、今年の収穫を祝う祀。村の無病息災や豊年を祈願する祀。豊年祭相撲を取る。	○□	ウントネ、公民館、土俵、ミャー	○兼アラセチ	サトノトネヤ①,イケダノトネヤ	△	生活館、ミャー	○□	カミミチ、ミャー、トネヤ、土俵	□	公民館、ミャー、土俵	5	4	0	0	3
旧暦8月最初の丙の日	アラセチ，アラセツ（八月踊り）	五穀豊穣に感謝し，来年の豊作を祈願する祀。アラセチから八月踊りが始まり、シバサシ、ドゥンガの各まつりの前後から３日間にわたり各集落で集団で踊る。	△	両トネヤ前⇒ウントネ前,公民館	△□兼豊年祭	全トネヤ⇒公民館					□	公民館、ミャー	3	0	0	2	1
アラセツの7日後の壬の日	シバサシ（八月踊り）	各家々の軒先にシバを突き刺し家々から悪霊を追い払う行事	△	集落、各家	△	集落、各家					□	公民館、ミャー	3	0	0	2	1
シバサシの後の甲子の日	ドゥンガ（八月踊り）	土の神の祀。先祖を供養する祀	△	集落、各家	△	集落、各家					□	公民館、ミャー	3	0	0	2	1
旧暦9月の良日	タネオロシ	稲種を播き、豊作を祈願する。	×	浜									1	0	1	0	0
旧暦9月9日	ハマジュウガン、ハマウガン（浜漁願）	漁師が航海の安全を祈る祀	×	ウントネ	○	浜							2	1	1	0	0
旧暦9月9日	九月九日豊年祭	氏神、家神の祭りの願立て日。一年の無病息災を祈願する。敬老会を兼ねるところもある。豊年祭相撲をとる。			○□	サトノトネヤ①、イケダノトネヤ、体育館、公民館、土俵	○兼十五夜、敬老会	テラ、生活館、ミャー、土俵	○	公民館、ミャー			3	3	0	0	1
旧暦11月初戌の日	フユウンメ	芋類の収穫を祝う祀、全体の感謝祭	×	ウントネ	○	全トネヤ	×	不明					3	1	2	0	0
集落ごとに異なる	敬老会	南部域の「豊年祭」に近いもので、相撲、八月踊り、余興といった要素で構成されている。（対象地域では豊年祭や十五夜と一緒に開催されることが多い。）	□	公民館、ミャー、土俵（十五夜と同時）	□	体育館1月第3日曜	□兼九月九日豊年祭、十五夜	生活館、ミャー	□	公民館、ミャー	□	公民館、ミャー、5月	5	0	0	0	5
行事数とその内訳（内訳は重複あり）			13行事 ○：2　×：7 △：3　□：2		11行事 ○：7　×：0 △：3　□：2		6行事 ○：1　×：3 △：1　□：1		5行事 ○：2　×：2 △：0　□：2		9行事 ○：0　×：4 △：0　□：5						
神役の存在			なし		3名		なし 豊年祭時に依頼		なし		なし						

【凡例】○：現在実施されているノロ祭祀　×：かつて実施されたが現在実施されていないノロ祭祀　△：かつてのノロ祭祀が集落の行事へと変容　□：集落の行事
※祭祀の詳細は文献10),14),18),19）による。

ヤを建て直したことで[20]，ウントネ前の広場の面積が約半分となってしまった。それでも親ノロがいた頃はトネヤ前の広場に集まって踊っていたが，不在となった後は，形式的に踊りの最初と最後にトネヤ前に集まった後，ミャーで踊る形態をとっている。

一方,ノロ不在により執り行われなくなった行事には，「マンセン神祭り（ウムケ)」「マンセンガミ祭り（オフリ)」「ハマジュウガン」など7行事がみられ，このうち「マンセンガミ祭り（ウムケ)」をはじめとする 4 行事は親ノロや集落の女性らがいずれも海や浜に赴くものであったことより,本来カミヤマからカミミチ，トネヤ，ミャーを経て海に至る神のために執り行われるノロ祭祀において，海との繋がりが薄れつつあるといえるであろう。

以上より，大熊において現在まで継承されたノロ祭祀および集落行事に転じた祭祀の双方において，祭場であるトネヤ（ウントネ）は個人所有でありながら今なお集落のパブリックスペースとして活用されていることが捉えられた。また，ミャーはノロ不在後のトネヤの役割の一部を担う場として活用されており，今後の集落行事における中心の場となり得ることが示された。なお，TN 氏へのヒアリングより，カミヤマとカミミチの具体的な位置などについては集落で継承されていないことが確認されたが，TN 氏が少年期になんとなく怖くて近寄らなかった山（図－3①）が，聖地であったために畑地利用されなかったという伝承を聞いたことがあるとの回答を得た。この山は，湧上[5]や専門家の TK 氏へのヒアリングにおいてカミヤマであると示したものと一致しており，大熊のカミヤマは信仰上の継承はされていないが，名残りとしての云われがかろうじて残っている状況といえる。

（２）大棚

大棚集落は大和村のほぼ中央に位置し，北は海に面し他の 3 方は山に囲まれ，集落は大棚川の形成した海岸低地に立地しており（図－3②)，人口は大和村で最多の 277 人である[21]。NS 氏と U 氏によると，大棚における親ノロは平成 20（2008）年に逝去して以降不在であり，現在は子ノロと呼ばれる神役 3 名によりノロ祭祀が執り行われているものの，皆 80 歳以上と高齢であり，かつ，後継者が決まっていない状況にあるという。また，大棚のノロは役職に係わらず，各家にトネヤを抱えており，大棚川の東側の地区はアガンマ（池田)，西側の地区は「サト」と呼ばれることから，それぞれに「イケダのトネヤ」「サトのトネヤ（2 軒)」という名称がつけられている（図－3②)。U 氏によると，かつて神役が 7 名いた頃はトネヤも 7 軒であったが，現在はこれら 3 軒を残すのみとなっている。

表－2 より年中行事におけるノロ祭祀の継承状況をみると，全 11 行事中ノロ祭祀は 10 行事あり，このうち現在もノロ祭祀として継承されているものは「マンセンガミ祭り（オムケ)」「マンセンガミ祭り（オーホリ)」「フーウンメ」など 7 行事であった。これらが執り行われる場所に着目すると，「ハマウガン」を除く 6 行事において 3 軒のトネヤのいずれかが活用されていた。

ノロ祭祀から集落行事へと転じた行事は，「九月九日豊年祭」と

同時に開催される「アラセチ（八月踊り）」とこれに関連する 2 行事であった。これは，かつて八月踊りは全てトネヤ前の広場で行われていたが，高齢となったノロへの負担軽減のため，九月九日豊年祭関連行事を一括して壮年団長が取り仕切る措置を取ったことに依る。U 氏によると，本来豊年祭はノロが係わる集落最大の行事であり，土俵と公民館の間に塩を撒くなど多くの役割があるが，将来的にノロが不在となった場合にも集落行事として取り仕切れるようにするために，区長はじめ集落で取り決めたということであった。

集落の行事としては，豊年祭と並ぶ規模の大行事である「敬老会」があり，毎年 70 歳以上の老人クラブ所属者 100 名以上が参加する。これに加え，奄美の中心都市である奄美市名瀬の郷友会からの参加者も多いことから盛大に行っている。開催日程は従来固定されていた十五夜ではなく，集落を出た人にも配慮して 1 月第 3 日曜日に学校の体育館で行っており，現代の生活様式に配慮した対応がとられていることがわかった。

以上より，大熊と同様に大棚においても現在まで継承されたノロ祭祀および集落行事に転じた祭祀の双方において，祭場であるトネヤは集落のパブリックスペースとして活用されていることが捉えられた。一方で，平成 17（2005）年に現在の公民館竣工に伴いミャーが消失したため，集落全体の行事を執り行う場として本来ノロ祭祀とは全く関係がない公共施設である小学校の体育館が担っていることが捉えられた。

また，図－3②より，大棚には「メンヤマ（前山の意）」と呼ばれるカミヤマとカミミチが存在するものの，行事では活用されていなかった。カミヤマにはケンムン（奄美群島に伝わる妖怪。本土で言う河童的要素に近い存在。）が出るという伝承があるため，立入・樹林の伐採を禁じており，カミミチについても掃き清めるなどは行われていないとのことであった。U 氏によると，30 代以下の若い世代はカミヤマなどの聖地やノロ祭祀への関心が薄い印象を受けていることより，集落内におけるノロ祭祀の伝承の在り方が課題となっているといえよう。

（3）名音

大棚同様，奄美大島の北岸側にある大和村にある名音集落は，名音川が形成した海岸平野の河口部に位置する（図－3③）人口 208 人の集落である[21]。集落最後の親ノロを母に持つ F 氏によると，名音には琉球より直接任命されたインバン（印判）ノロがいたといわれ，昭和 55（1980）年まで親ノロ（現地ではウヤノロ）がいたが現在は不在であり，九月九日豊年祭（旧暦九月九日の祀）では集落でお金を出して鹿児島本土に嫁いだ女性（ノロの継承者，調査時 70 代）に来て拝んでもらっている状態である。この他にも，かつては 10 名ほどの男性神役・グジヌシがいたが，鹿児島本土への転出などにより現在は不在である。

表－2 より年中行事におけるノロ祭祀の継承状況をみると，全 6 行事中ノロ祭祀は 5 行事であり，このうち現在もノロ祭祀として継承されているものは「九月九日豊年祭」のみであり，①テラ（名音神社）で祈る，②神役の女性がミャーの土俵を祓う，③相撲を 2，3 番とる，④祝う，という手順で行われる。他の集落同様，「九月九日豊年祭」は集落を挙げての一大行事であり，集落外に出た人が集まりやすいよう，ノロ不在後に集落行事へと転じた「豊年祭（十五夜）」と「敬老会」を合わせて 1 度に執り行っている。執り行う場所は公民館的役割を果たす名音生活館とこれに併設するミャーおよび常設の土俵である。一方，ノロ不在により執り行われなくなった行事には，農業収穫に係わる「フーウンメ」と「フユウンメ」があり， F 氏より，集落の総意かつ区長の承諾の下，中止となったとの回答を得た。

写真－1　名音におけるカミミチの一例

以上より，名音では親ノロ不在後，外部より神役を呼び寄せるにあたり人が大勢集まる行事を「九月九日豊年祭」と同時に行い，かつ行事を取り行う場を名音生活館，ミャー，土俵と集落の中心に集約していることが捉えられた。

また，図－3③より，名音にはカミヤマ，カミミチ，トネヤが存在するものの，いずれも祭祀には活用されていなかった。F 氏によると，カミヤマは水源涵養林であることより立入りや伐採が禁じられていた。カミミチは，随所に細い道を通す，またはブロック塀に隙間を作るなどして残していた（写真－1）。トネヤについては，他の集落では祭祀用にトネヤを建てるが，名音ではノロが住む家をトネヤとする風習があり，最後の親ノロ宅がトネヤとして物理的に残ってはいるものの，現在は機能していないことを確認した。

（4）津名久

津名久集落は，北海に面し，他の 3 方を山に囲まれた，津名久川河口部のわずかな平坦地に位置する人口 161 名の小規模な集落である[21]（図－3④）。母親が子ノロであったという N 氏によると，ノロは 40 年以上不在となっている。

表－2 より年中行事におけるノロ祭祀の継承状況をみると，全 5 行事中ノロ祭祀は 4 行事であるが，現在はノロの代役を区長が務める形で「九月九日豊年祭」がノロ祭祀として，「豊年祭(十五夜)」がノロ祭祀と集落の行事を兼ねるものとして継承されている。これに「敬老会」を合わせた 3 行事が集落における重要な行事として全て公民館とミャーで執り行われているが，十五夜では相撲を取る集落の男性達が井戸からミャーに至るカミミチを通り，その道中でトネヤ前の広場に集合するなど，祭祀空間が積極的に活用されている様子が確認された。一方，ノロ不在により執り行われなくなった行事に，海神・テロコガミを祀る「オムケ」「オーホリ」があるが，これは図－3④において，カミミチがノロ祭祀において神が降臨するとされるカミヤマにも，最終目的地である海にも達していないことより，ノロ祭祀が海との関係性を消失しつつある過程にあることが窺えよう。

（5）根瀬部

奄美市と大和村との境界に位置する根瀬部は人口 155 名の小集落であり，近年は著しい人口流出が集落存続に係わる問題となっている[19]。

表－2 より年中行事におけるノロ祭祀の継承状況をみると，全 9 行事中ノロ祭祀は存在せず，集落の行事として存在するものが 5 行事であった。このうち「九月九日豊年祭」を除く 4 行事は他の集落ではノロ祭祀から転じたものであったことより，かつてはノロ祭祀であった可能性が高いと考えられる。K 氏によると，幼少の頃よりノロは不在であり，「アラセツ」「シバサシ」「ドゥンガ」は区長が日取りを決め，公民館とミャーで執り行っているとのことであった。集落全体の祭祀である「豊年祭（十五夜）」「九月九日豊年祭」は，近年参加者が減少傾向にあり，規模も小さくなっていることが伺えた。また，「ハマオレ」「イネシキョマ」など 4 行事は，親の代の頃にはノロ祭祀として行われていたという回答を得ている。

図－3⑤より祭祀空間の継承状況をみると，カミヤマとミャー

表－3　祭祀空間の継承状況と祭祀における活用状況との関係

			大熊	大棚	名音	津名久	根瀬部
祭祀空間	カミヤマ	継承	無※	有	有	有	有
		活用	—	—	—	—	—
	カミミチ	継承	無	有	有	一部継承	無※
		活用	—	—	—	○：1 □：1	—
	ミャー	継承	有	無	有	有	有
		活用	○：1 □：2	—	○：2 □：1	○：2 □：2	□：5
	トネヤ	継承	有	有	有	有	無
		活用	○：2 △：1 □：1	○：5 △：1 □：2	—	○：1 △：1	—
付帯施設	公民館 生活館	所在	有	有	有	有	有
		活用	○：1 △：1 □：2	△：1 □：2	○：2 □：1	○：1 △：1 □：1	□：5
	土俵	所在	有	有	有	有	有
		活用	○：1 □：2	○：1 □：1	○：1	○：1 □：1	□：1

【凡例】○：ノロ祭祀　△：かつてノロ祭祀であったが集落の祭祀へと変容
□：集落の祭り　—：該当なし
※集落では把握していないが、湧上[9]において特定されている。
※※数値はのべ活用件数を示し、重複する。

のみが継承されており，トネヤについては跡地が残されるのみであり，カミミチに至っては伝承されていないことが捉えられた。なお，図－3⑤においてカミヤマが 2 つみられるが，このうち根瀬部のカミヤマは前田川の上流にあるものであり，もう 1 つは隣接する集落のものであり，隣接する集落のカミヤマについても把握し，立ち入らないという回答を得た。

５．ノロ祭祀と祭祀空間の継承状況のまとめ

上記の結果をもとに，ノロ祭祀と祭祀空間の継承状況の関係性は，表－3 のように整理される。

物理的な継承状況をみるとカミヤマは 5 集落，ミャー，トネヤがそれぞれ 4 集落であり，これらは比較的継承されやすいといえるが，活用状況をみると，ミャーは現存する 4 集落で活用されているのに対し，トネヤは 3 集落，カミヤマに至っては全く活用されていなかった。カミミチは 2 集落で継承,活用は津名久のみであり，本研究の調査全般においてカミヤマからカミミチを経て海に繋がるという一連の祭祀空間の構造についての言質が得られなかったことより，カミミチ自体が消失寸前であることに加え，ノロ祭祀空間の本質の継承も途絶えつつあることが捉えられた。このような物理的継承と活用との差に影響する要因として，ノロ不在後にそのままノロの祭りとして継承される大熊や津名久では，ノロ不在後もトネヤを集落のパブリックスペースとして活用することで，カミミチ（津名久のみ）－トネヤ－ミャー－土俵という祭祀空間同士の繋がりが保たれ，結果としてノロ祭祀そのものの集落内継承に貢献しているといえよう。

一方で，ノロの在・不在に関わらず，全ての行事をそのまま継承することは困難であり，大熊における豊年祭（十五夜）と敬老会，大棚の豊年祭（十五夜）とアラセチのように，集落を挙げての重要な行事を集約せざるを得ない状況に置かれている。これらの行事には多くの人が訪れるため，琉球由来の「相撲(現地ではシマ相撲と呼ぶ)」を見れるよう配慮されている。このことより，例えノロ祭祀が集落の行事に転じようとも，豊年祭相撲を執り行う「豊年祭（十五夜）」「九月九日豊年祭」は今後も継承されるといえ，同時に開催の場となるミャーが持つ地域の拠り所としての役割を果たし続けると予想される。

以上，本研究において，祭祀空間の構成とその活用状況との関係を分析した結果，ノロ祭祀が集落行事に集約するという祭祀の変化に対し，ミャーに公民館が建てられる，小学校を活用するといった祭祀空間の変容が確認された。これは，祭祀と祭祀空間が相互に関係しつつ，公を担う役割に変容し，結果として集落全体を文化的空間として保全することに寄与しているといえる。

今後，奄美大島におけるノロ祭祀空間を継承するためには，祭祀空間がコミュニティの拠り所として機能できるよう集落行事での積極的活用の継続が望まれる。一方で，物理的な継承を伴うには，ノロ祭祀空間の土地所有についても言及する必要があるといえ，引き続き現地で土地所有の履歴や，そこに至る経緯などについても追跡調査の必要があるといえるであろう。

謝辞: 現地調査を行うにあたり，奄美市立奄美博物館学芸員の高梨修氏，久伸博氏，大和村中央公民館館長の中山昭二氏，および地域住民の皆様に大変お世話になりました。ここに謝意を表します。本研究は平成 28 年度科学研究費補助金基盤研究 C「地域再生に資する拠り所としての伝統的な祭祀空間のマネジメントに関する研究」（代表：上甫木昭春）の一部を使用しました。

補注及び引用文献

1）水田拓（2006）：奄美群島の自然私学―亜熱帯島嶼の生物多様性―：東海大学出版部，1-16
2）上野和夫・大越公平編集・解説（1983）：奄美の社会構造：現代のエスプリ 194 号奄美の神と村，7-23
3）昇曙夢（1949）：復刻　大奄美史：南方新社
4）山田恭幹（2013）：写真のアルバム　奄美の昭和：樹林舎
5）「奄美学」刊行委員会編集（2005）：奄美学－その地平と彼方：南方新社
6）湧上元雄（1974）：沖縄・奄美の民間信仰：明玄書房：47-58，78-81
7）ヨーゼフ・クライナー（1982）：南西諸島における神観念・世界観の再考察 ： 奄美の祝女(ノロ)信仰を中心に：沖縄文化研究 10，153-209
8）村武精一（1984）：祭祀空間の構造－社会人類学ノート：東京大学出版会，94-114
9）永田隆昌・高見敞志・松永達・九十九誠（2003）：奄美大島における信仰祭祀の空間秩序：集落の空間構成原理に関する研究 その 2：日本建築学会計画系論文集 68（563），197-204
10）改訂名瀬市誌編纂委員会編（1996）：改訂名瀬市誌－第 3 巻民俗編
11）大和村（2010）：大和村誌
12）大熊壮年団（1964）：大熊誌
13）津波高志（2012）：沖縄側から見た奄美の文化変容：第一書房，220-221
14）崎原恒新・山下欣一（1975）：沖縄・奄美の歳時習俗：明玄書房
15）文献 9）および専門家 TK 氏へのヒアリング調査結果をもとに筆者が作成した。
16）奄美市（2017）：奄美市の人口：奄美市ホームページ〈https://www.city.amami.lg.jp/shimin/shise/toke/jinko/index.html〉，2017 年 8 月 31 日更新，2017 年 9 月 25 日参照
17）沖縄大百科事典刊行事務局（1983）：沖縄大百科事典：沖縄タイムス社
18）神谷裕司（2010）：奄美，もっと知りたい―ガイドブックが書かない奄美の懐―：南方新社
19）奄美市（2014）：奄美ガイドブック 2014　もっとわかる奄美大島，：奄美市紬観光課
20）奄美市教育委員会（2004）：奄美大島名瀬市大熊集落遺跡群―大熊地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書：奄美市教育委員会
21）大和村（2017）：5 月 30 日現在の人口・世帯数：大和村ホームページ〈https://www.vill.yamato.lg.jp/update/169.asp〉，2017.5.30 更新，2017.9.25 参照